



國語・國文學

小枝繁の處女作から京傳を眺める

鈴木敏也

「戯作者小傳」の小枝繁の項を見ると、

絳山と號す、又齏醜陳人と號す。通稱露木七郎次と云ふ。擊劍に長じト筈にも委し。水府の御主殿付にて、初め青山焰硝藏に住し、後四谷忍原横町（傳馬町三丁目横町）に移る。

とあつて著作目録を掲げてゐる。「浮世繪類考」の附録も全く同文である。また、家を城西獨醒書室と號し、寶曆九年生、文政九年八月七日歿、享年六十八であつたと「日本小説年表（山崎氏編）の人名辭書の部に見える。これは「名人忌辰録」（關根只誠翁）記載の歿年に據つて、生年を逆算したものと推測される。然るに「草双紙と讀本の研究」（水谷不倒氏）には「天保三年四月十九日歿、享年未詳、市ヶ谷藥王寺前町眞宗白雲山淨榮寺に葬る。法名道元院釋直信

小枝繁の處女作から京傳を眺める

居士」とあり、猶、もと幕臣で後に水戸家御主殿附の役人となつたとある。御主殿附（齊修夫人と思はれる）になつた事實は、元來幕臣であつたことを肯定させる。

そこで、この人の歿年に就て一つの質疑を提出したい。頃日、小枝繁の自筆稿本「南枝梅薰九猫士傳」初輯なるものを見た。標題の示すやうに「南總里見八大傳」の模倣作の一書である。八大傳初輯刊行は文化十一年であつた。繁はその前年に「寒燈夜話小栗外傳」を著し、水滸傳式開口と十勇士點出の構想とを案出してゐる。この着想は八大傳へ何等かの示唆を與へたのではあるまいか。それはともかく、八大傳には模倣作として大内家の「十杉傳」とか、尾子氏の「九牛傳」とかが相次いで現はれたが、更にこの「九猫士傳」を見たのである。こゝで問題となるのはその序文の一節である。（内容に就ては改めて執筆する）。即ち「今茲丙申梅雨之閑、出而潤色、拙手之病、冗長蕪穢、僅綴其端、滿六卷云々」の文字がある。この丙申は天保七年に當り、此年までの存命は確實と見なければならぬ。従つて文政九年歿も天保三年歿も疑はしくなつてくる。彼は此書出版の期日が豫測できなかつたらしく、序の終りに年號を空字として「……吉且、小枝繁書蒼山茅廬南軒之下」と二行に書いて捺印（墨書）してある。蒼山はもちろん青山の事で、此年代には四谷から青山へ再び歸つてゐたのか、また四谷へ移る前なのか、それも考勸の中に入れねばなるまい。水谷氏のは日附も法名も明白なので、天保三年の三は誤植かとも思はれる。もしまた文政九年が天保九年の誤記としても問題は解決する。御示教を仰ぎたい。

この小枝繁の讀本初筆は「復讐繪本東嶽錦」と云ひ、文化二年版で、北齋畫の五卷物である。當時の讀本には、

大體として短篇集型の奇異怪談と章回體型の野乘史譚との二様式が存在してゐた。又、極めて概括的に推移の迹を辿れば、標題に「古今奇談」などの角書を持つた作は寛政から享和にかけて流行し、享和文化の交には「繪本何々」と稱するものが著しく目に立つて來た。それは必ずしも速水春曉齋の如き、畫作同一人の著作のみではなかつた。而してこの繪本云々の作柄は多く野乘風の内容であつた。とにかく「東嶽錦」が復讐奇話と角書し、更に繪本の二字を冠つてゐた點は、讀本の史的展開をそのまゝ跡づけるものとして、輕々しく看過し難い。

次に作家側から見ると、江戸の讀本界は寛政の頃から漸層的に賑盛を來したのであつた。明和安永の交にあつては庭鐘・秋成・椿園等の上方作家が輩出したが、綾足を東西移動の楔子として、遂にその中心は江戸作家に把握されたのである。

『近世物之本江戸作者部類』卷二に「讀本作者部、上」として、吸露庵綾足・風來山人・平澤月成・蛭蛸子・芝全交・山東庵京傳・桑楊庵光・雲府館天歩・曲亭主人の九名を擧げてゐる。綾足は章回體小説の創始者として史的位置を確保してゐるが、風來・月成・全交は青本系統の滑稽物作家である。京傳・馬琴は斯界の大立物として暫く措く。残る三四の代表作を見るに、蛭蛸子の『奇傳新話』(六卷、天明二年?)は「辛苦節操死再嫁細川頼連」以下八個の談柄を編した短篇集であり、桑楊庵の『聞老きんらう菟道園うぢのの』(五卷、寛政四年刊)も亦宇治拾遺風の説話集である。而して天歩の『邂逅物語』(五卷、寛政九年)は、西成某を繞る妬婦臯月と賢妾お照との三角關係を敘し、遂に妻妾席を換ふるに至ると云ふ、支那稗史系の章回體小説である。即ちこの局限せられた範圍にあつても、二様式が並びに行はれてゐた

事が看取されるが、この間に處した京傳馬琴はいづれも章回體様式の浪漫的作品に染筆してゐるのである。京傳は「忠臣水滸傳」(前後十卷、寛政十一年、享和三年)「安積沼」(五卷、享和三年)「優曇華物語」(七卷、文化元年)を次々と發表し、馬琴は「高尾船字文」(五卷、寛政七年)の後「繪本大江山物語」(五卷、同十一年)を経て、文化元年には、「月氷奇縁」(五卷、享和三年作)、「小説比翼文」(二卷)「稚枝鳩」(五卷)、「曲亭傳奇花鏡兒」(二卷)、「小夜中山石言遺響」(五卷)を矢繼早に公にしてゐる。即ち、文化初頭は江戸讀本興隆の高潮期であつた。「作者部類」の著者(馬琴)は、恐らく「讀本作者部の下」に於て關山・鬼武・焉馬・蓬州・一九・種彦等と共に、小枝繁をも説く豫定であつたらう。しかし彼自身の記述に詳細なる餘り、企圖せる四卷のうち一二の兩卷のみを成し、餘卷はまだ稿せず、異日暇あらん折、稿を續けて録すべし」と謂はざるを得なかつたのである。かくして小枝繁に關する記述は、馬琴の筆には上らなかつたけれど、當代に於ける讀本作家として相應の地位を占むべき業績を残してゐる事は、その十數部の著作が實證するところであり、在來の小説史が常に彼への一瞥を避けない所以でもある。

## 二

さて「東嶽錦」に歸るが、一通りその構成に就て、大筋を語りながら展望したい。まづ發端に於て平和なる地方の豪農を點出し、性格を異にする兄弟をあらはし、一家の柱石たる父親の死と共に、早くも家運衰微の兆を此處に据えた。即ち武州神名川の笠原平右衛門が病に仆れる。聰明にして温厚な弟息子橘次は京都に遊學し、好人物だけれど短氣で酒癖ある兄の平太は、相續したけれど家道を修める事が出來ない。妻の父母次の耳順の祝宴に招かれ、零落の悲しみをつくづく味つた彼は、舅から二百金を恵まれ、家運再興を誓つて家路についた。途中一老僧の奇瑞を見、その

訓戒に反省しながら、悪友に誘るゝまゝに旗亭に盃を啣む。この酒痴が、一篇の主核たる復仇事件の素因を成し、且疑獄誘發の機縁を作つたのである。即ち夜陰に歸宅した平太は、弟の許嫁花兒はなごを威かした。それは、かの金は花兒を娼家に賣つて得たものだとの戯言を弄し其まゝ寢入つて了つたのである。花兒は沈思の末、京の橘次の許へ走らんとて潜に脱出したが、計らずも兄左太郎に邂逅してその郷里へ赴く事とする。一方酒友嘉平は、その妻に平太に會つた事を語る。隣室でそれを偷み聞いたのが弟の不良兒嘉藤次であつた。彼は推した——此夜平太は泥酔し、その家は無人である、かねて懸想せる花兒に迫る好機が與へられたと。忍び入つた彼は、花兒の脱出後なるを知つたが、思はずも金包を得た。そこで目覺めた平太を斬つて逃れ出たのである。平太横死は、こゝに花兒への嫌疑となり、遂にして捕へられた。情夫共謀との役人の推斷は、兄と知れて解消したが、絹商人なる左太郎所持の金額と紛失金との合致は、遂に二人を囹圄の人とした。たゞ奉行には考ふる所あるらしく、急ぎ、丹次をして橘次を呼び下らしめる。かく平太一時の座興が、純眞の處女を不幸の淵に沈めて事件展開の第一系を示し、酒友の閑談は端なくも不逞行爲を示唆して、殺戮の慘を生み、事件展開の第二系を誘起した。共に訓戒を犯した酒痴の因果に外ならない。この發端に準すべき説話範圍は、二卷の半ばまでを費してゐる。次で説話の場面は京洛の地に移動するが、巻秩の節序整齊を保つものとは云ひ難い。

京の橘次は將軍の侍士細川織部の知遇を得て、その家に寄寓してゐる。こゝで大猿のあばれるのを取抑へた事件は、彼の才智を立證すると共に織部との交渉を生ずる點に重要性がある。而して織部の妹環たまの戀は、春興の笛聲に因を發し、次で侍女の文使となり、容れられぬ怨情に自害の所作を演じ、遂に男心が摧けて、こゝに靈犀一點の紅を解す

るに至る。——凡てが敘切型の濡場である。この場合の橘次はその人間味を云爲されるよりも、むしろ優柔性を暴露した者である。即ち許嫁花兒への情感の發動が毫も認められない事は、彼の人物性格への大なる疑問符を投げかけるものである。綢繆の媚態が明るみに出るや、直ちに情死を企て、娘の乳母の才覺に頼つては、導かるまゝにその里に走るが如き、いよ／＼出でて情痴の人なるを語るものである。途すがら悪棍數輩を斬つたのは、たゞ武士としての體面を保つにすぎない。

作者はこゝで橘次閑居の里なる八幡村の保正（村長）の不義事件を敘述して、物語ることに頗る詳しくものがある。保正の治部平は鰥夫の淋しきまゝ百姓惣太の妻お絹の美貌に迷ひ、女も夫の迂愚を厭つて彼の情に絆される。彼は不僕を使嫉して惣太に質物として衣服を與へたが、その衣は將軍から拜領品で、盜難に掛つたと訴へたため、惣太は捕へられて所刑される。思ふ壺にはまつてお絹は表面上雇女として保正の家に移つた。然るに惣太の怨鬼が禍して、女は奇病に罹り夜々苦惱し、保正も亦不慮に傷き、二人は同刻に悶死してしまふ。保正の弟庄司の幼女が、その頃夜毎に魘される。これも怨鬼の祟りと悲んだが、占師に據れば、虚に乗ずる狐狸の業と云ふ。橘次がこの妖異を退治したが、それは老狸の怪であつた。この八幡村事件は全構成の上に何等の契機をも發見し得ないものである。姦惡が生み出した幽鬼の活躍によつて、濃彩と變幻とを所期したのであらうけれど、説話展開の本幹と關聯するところ無く、到底挿話以上のものであり得ないのである。むしろ織部一家との切實な纏絡を提撕するか、然らざれば削除に委すべき一段である。本筋と結ぶ兄の亡靈出現の手法も、御都合主義の相談つくらしい氣合が強く、且幽鬼譚の直後であるだけ重複の感が深い。即ち五卷物の中軸たる第三卷は、全く挿話のために費されたもので、内に盛られた話自體は甚だ

賑々しいけれど、それだけ全構成の上に緊密性を失ふものと謂つてよい。

この八幡村事件の後、橘次が歸國を享けた第四卷は、時間的に遡つて府中に於ける嘉藤次の「悪」の第二段を寫してゐる。神名川を逃亡した彼は、府中の居酒屋を通りすがりの美女を見た。給仕女からその素性を聞き、突差の間に姦計を畫策する。女の父が旅に出てゐるので、手紙を託されたとして留守居の妻を欺き、宿り込んだ夜、娘の許に忍んだ情夫吉三の短拭と起誓文とを奪ひ、それを證據に吉三の親（質屋の重次）を強請つて百兩を捲上げる。而して娘には驅落を勧め、逃れ出た戀の二人を追ひかけて脅迫し、男を斬り娘に迫り、拒まれて遂にこれをも殺し、路金を奪ふ。そこへ來合せた四人の凶賊と亂闘して、彼等をも屈服させ、箱根の山寨に案内させて賊魁となる。即ち詐欺・強請・殺人・迫奸・強奪の諸罪惡が連鎖的に遂行されてゐる。「悪」はその絶頂に達したのである。

橘次は箱根路で小賊に逢ふ。追ふて道を失ひ灯影を尋ねて茅屋に到り、一少女を見る。少女の風貌と態度とに、ある示唆が動き、こゝで府中事件と橘次の行動とが結合される。少女は府中の質屋重次の娘であり、吉三の妹に當る。彼女は兄の横死の後、病む父と山の湯に療養するうち、賊に誘拐されたのであつた。賊魁は嘉藤次で兄の仇である。この旨を父に告げよと橘次に頼む。その夜陰微かな泣聲は橘次を裏山に導くが、そこに展開せる怪奇的場面は、老僕の死と共に嫂との邂逅を誘致し、こゝに兄の死の真相を知るの機因を作つた。即ち平太の歿後、温泉に出養生した嫂は、賊に捕へられたが、嘉藤次自ら平太の下手人たるを自供し、且彼の妻たらんことを強要してゐるのであつた。橘次はまづ嫂と少女とを救つて脱出せしめた。こゝに復仇の機會を待望しつゝ、説話は團圓に近づかんとする。

橘次は人里に下つて箱根凶賊の世評を聞くに、彼等は官威を畏れず、白晝に横行を敢てすると云ふ。而して大磯の

花街に流連する者はその巨魁で、常に兩三輩と共に黒頭巾を用ひてゐるとの事である。そこで橋次は策を廻らし、歸路を扼して遂にこれを捕へ、官に訴へて武州に彼を送致した。嘉藤次の逮捕から裁斷となり、左太郎兄妹は宥されて事件は落着したが、更に平太幕前の敵討を以つて終結する。この第五卷に於ける相模路はかなり急速度の説話旋轉で、最終への足どりに、やゝ匆忙たる感がある。しかし全般から觀れば、題簽の角書「復讐奇話」の文字に對しては、破瀾重疊の妙案もなく、迂餘曲折の變幻もない。比較的平板に進展した説話層の累積であつて、機構融化的密度薄く、たゞ部分的興味に、或る程度の巧緻を散見するばかりである。

以上によつて知らるゝやうに、『東嶽錦』の構成は、嘉藤次の「惡」が根幹を或してゐる。それは神名川事件(第一「惡」と、府中事件(第二「惡」との二條の連鎖から成立する。この中間に京の巻が挿入されたゝめ核心から遊離する感が強いけれど、箱根に至つて漸く根幹に纏絡する。而して、そのまゝに大團圓に到達するのである。要するに、京の巻を餘りに語り過ぎた事が全構成に歪曲を與ふる結果を生んだのである。且神名川事件の嫌疑者は餘りに長く没交渉のまゝに放置された嫌がある。かの歪曲を直すと共に、剪除すべきを去り、補強すべきを加へて、締釘の二三を適宜に打ち込まなくては、均整を保つ機構美はこの作品に所期し得ないのである。

## 三

次に人物の方面を見るに、まづ平太がある。「温順にして些しき才智はあれど一箇の癖あり」とて酒狂が擧げられてゐる。その父が臨終に當つての苦勞もこの點にあり、五十歳になるまでの禁酒を命じた程である。しかし彼が性來の好人物であるのと、それを利用する周圍とによつて、彼は家産を蕩盡した。かくして舅の訓戒によつては甦生を誓約



し、奇僧の啓示によつては反省もした。けれども、掌を返すやうに忽ち誘惑に陥つて我を失ひ、酒が云はする饒舌と戲言とに義妹を荆棘の道へ追ひ遣るのみか、自己の生命さへ失つたのである。世上に類型の多い酒痴の徒ではあり、且この作品では最初の巻に顔を出すだけなのに拘らず、一篇の主核生育の動因を成す點で重要人物の一である。

弟橘次は復仇事件に絡んで主人公の位置にあるべき人物である。しかし仔細に點檢すればその影は薄い。聰明伶俐にして勇を好めども、漫りに人と争はず、甚だ謹厚なる天質」と敍してあるやうに、父も末頼もしく思ひ、京に上せて文武の道を學ばしめたのであつた。けれど彼の行動は、謹厚真摯なる青年としては必ずしも享け入れる事は出来ない。居常に於ける好學と才氣とは肯定し得ても、情意生活の上の缺陷には看過し難いものがある。即ち、故郷の許嫁を忘れて寄寓せる家の娘に感溺し、事露はるゝや情死を企て、遂に相携へて逃亡し、片田舎の詔住居に逸樂の日を送ると云ふ事實がそれを語つてゐる。たとへ、前に狡猿を懲らし後に妖狸を討ち、また小賊五六輩を斬伏せたにせよ、士人としての風格矜持に缺くる所があらう。加藤信齋（仁齋を振ぢつた名）に學び細川織部に親炙した事は、むしろ師を辱め友を賣るの陋を語るにすぎない。作者は、好感をもつてこの青年を遇するの態度、著しきものが有るが、兄の酒痴に對して弟は情痴の機を免れまい。箱根以後の行動は、京に於ける類唐を反撥して、初めて士人の面目を發揮し來つたが、最後に至り、牆を越えし女を正妻とし、われを慕ふがため計らずも囹圄に苦んだ許嫁を妾とする結果は、本末顛倒の取捌で、橘次には志操なく、作品には勸懲正しからざるものを認めさせるだけである。

これに對して敵役の嘉藤次は頗る活躍してゐる。彼が「惡」の才略は機敏であり尖銳である。兄夫婦の談柄を偷み聞かや、直ちに立つて平太の家を襲ひ、邪戀の齟齬を察すると共に、金包を納め、突差の中に殺人を犯す。企圖と臨

機とを問はず、その行動は極めて輕捷である。そこに遲疑なく逡巡なく、颯爽として潤歩してゐる。次で府中の居酒屋に慰ふや、通りすがりの美女を見、その素性と家庭の事情とを巧みに聞込み、立どころに詐欺姦諂の策略を胸中に畫策する。隨緣放曠の方針と云へば、尤もらしい言葉であるが、これは全く、恐ろしくすばしつこい野郎である。こゝでも計畫的行動と臨機的行動とが錯落してゐるが、何等のへまを演じない。詐欺も強請も殺戮も、活潑々地に躍動して、正しき道に邁往するが如く、「惡」の遂行に徹底してゐる。取圍む強賊を屈服するや威嚇して山寨の主となり、直ちに黄金を散して衆賊に分配し、恩威並び行ふの舉に出づるなど、拔目のない男である。姦智に長けたと云へばそれまで、あるが、いかにも、きびくした親方である。彼の所業は凶惡そのもので、社會相に蠢めく蛇蝎であるけれど、綠林の徒としての潤達は失つてゐない。この點で嘉藤次はよく寫されてゐる。たゞ山寨の谿谷に於ける現實地獄と廓通ひの風體には、ある程度の異狀を認めざるを得ない。即ち前者には極端な殘虐味が横溢し、後者には茶氣滿々の滑稽感を誘致する。この二場面は先蹤模倣と云ふ事實が反映してゐるだけ、前半の嘉藤次にとつては、かなりの距離を覺えさせるものがある。其他の人物は皆副次的の位置にある者で多く語るを要しない。箱根山中の一つ家にゐた質屋重次の娘の明慧がやゝ目に立つが、橘次を繞る京の人々（織部、環）、八幡村の面々（治部平・惣太・お絹）など、すべて型にはまつた人物と云ふにすぎない。

こゝで作者の人物取扱法に關し、武州知縣の裁斷に所據して一瞥を與へよう。平太寡婦には「漫りに人を疑ふ、淺智、夫の仇を報ひたき一念、橘次に從つて仇討すべし」とあり、丹次には「漫りに人を疑ふ、花子を養ひて子とすべし」とある。この兩人への言渡しは妥當である。しかも次の左太郎に對して「實情を極めずして走る、絹の賣代半ばに

て訴訟費用を負担すべし」は、酷であり不當でもある。花子への「實情を極めずして漫りに走る、丹次の子として彼の意に従ふべし」と云ふ。その後半はむしろ彼女への好意であらうが、前半の吐責は無理解であり、温情に缺く威壓的言辭にすぎない。左太郎兄妹を斯く行動せしめた素因を考察すれば、彼等は感賞を受けた橘次以上に、犒らはれ同情されて然るべきである。これは事件の表面を撥撫するに留つて、作者の勸懲主義に透徹性と確實性がなく證左であらう。

#### 四

「東嶽錦」を一讀してすぐ聯想されるものは京傳の「安積沼」である。初丁の標題には「小幡小平次死靈物語」と角書がしてあるが、題簽には同じく「復讐奇談」と冠してゐる。目次の破題も漢文二行書、「并」としての並べ書きも其のまゝで、まづ形式の模倣がある。

「安積沼」の大筋は、山井波門が親の仇を尋ねて諸國を遍歴し、羽後男鹿山で誘拐された妻を救出し、月明の八郎湖畔に仇敵轟雲平を討取るのを骨子とし、それに小平次の巷談を絡ましたものである。即ち仇討と怨靈談の二條の綯交ぜを作爲としてゐる。この全般的構或の類似は動かすべからざるものと思ふ。説話展開の跡を辿れば、(一)敵討の動機、(二)敵討の發程、(三)敵討途上の挿話、(四)怨靈(敵討の本筋に交渉なし)、(五)敵討本懐と云ふ徑路である、これを「東嶽錦」に對照すると甚しい接近が認められる。たゞ、(三)は戀愛説話の挿入であるが、橘次は兄の死を知らずして愛欲に感溺し、波門は搜索途上の道草を食ふ。それだけの距離が在るが、主要人物に絡まる情話たる重點で合致してゐる。即ちこの二作品が、先づ同一形態の機構を有つと云ふ第一印象は肯定しなければならない。

次に(四)の怨靈談が全く本筋から遊離した説話である事も一致してゐる。「安積沼」では仇敵雲平の弟左九郎に關する點に、本筋との微細なる連なりがあるが、「東嶽錦」での治部平の話には橋次との聯關はない。單に治部平の弟の家に起つた妖異退治に交渉を生ずるのみである。たゞこの「弟」の身柄に係るところに隱微なる何物かが揣摩されるばかりである。しかし、この怨靈談の條は構成上の關聯こそ稀薄であるが、怨靈そのものの取扱手法は明らかに「東嶽錦」が模倣してゐる。

「安積沼」の左九郎は、俳優小平次の妻お塚と姦通してゐたが、旅興行に出てるた小平次を追うて、これを奥州安積沼に誘殺した。歸つてお塚と同棲したが、小平次の怨靈のためにお塚は悶死し、久しからずして左九郎も非業に死す。このお塚が一時咒文によつて救はれながら、遂に取殺される條が「雨月物語」の「吉備津釜」の持込みである事は、文辭の流用と共に世間周知の事實である。「東嶽錦」には、かゝる護符傳説の九十九様式こそ見えないけれど、閨房に於ける怨靈出現を初め、傷口の腐爛とか幻覺によつて身頼りの者を殺傷するとか、彼此間の交渉を否定するには餘りにも規を一にしてゐる。必ずしも不義の徒の本夫謀殺と、それに因る怨念から悶死への筋書が類似してゐると云ふのみではない。

更に(三)として提示した主人公の戀愛説話であるが、既に觸れた通り、二つながら挿話たる點に類似がある。「安積沼」の波門は、奥州狹布の里でお秋と云ふ娘に思はれる。自害の覺悟に驚かされた男は、遂に情痴の人となる。こゝで窓から下した白布に縋つて階上に忍ぶ段は、支那稗史「孝肅傳」の「樓上白布爲良媒」を踏襲したものと云ふが、場所が信夫摺の狹布の里であるだけ、異邦情調は目立たない。お秋は翌夜惡漢現西なるものが闖入してその毒手に斃

れるが、「東嶽錦」の橋次と環とは、歡會永しへの好運に在る。且、笛の音に縁る環等は淨瑠璃姫式の類型の多いものである。而してこの作者はかの「お秋殺し」の現西をこゝでは嘉藤次に持込み、府中長七の娘を殺さしめるだけの改竄を敢てした。即ちこの娘と環との一面を合してお秋と照應させる事ができる。二書に於ける此の挿話の交渉は、「鴛の衾ふとんに誘ひて、日來の幽情、花月の佳會、樂妓たけなあげていふべからず、已に襄王の夢醒て、しばらく互の志をかたりけるに、春の夜のあけやすく、朧月影傾、斗星闌干として、はや曉にちかかりければ、波門驚て別れ出なんとす。お秋袂をひかへて」、「安積沼」卷三。六丁の裏」と、「鴛の衾に誘ひて、日來の幽情此夜に發し、膠漆の語ひ其の娛樂、更に云ふべき方なきに、春の宵の明けやすく、已に襄王の夢醒めければ、橋次驚き起て去らんとしければ、環橋次が袂をひかへて」（「東嶽錦」卷二、十六丁の表）とを對比すれば、同じく巫山の痴夢を描く類型的成語とは云へ、その風趣あまりに近いものがあらう。而して内容としての自由戀愛型は、享和文化の交の讀本には往々普遍的事項として取扱はれ、馬琴すら「月水奇縁」（倭文と玉琴）、「比翼文」（助市とお妻）等にこの傾向を見せてゐる。京傳はもとより「優曇華物語」の峻二郎・弓子、「曙草紙」の宗雄・櫻姫、また小枝繁の作では「壁落穂」の求馬・彌生の如き、すべて好一對の才子佳人を動かしてゐる。

類似はこれに留らず、茲に深山幽谷の無人境に於ける現實地獄の一場面がある。「東嶽錦」に見える箱根の賊塞の裏山は、「大石の影に赤身の男女を收縛いよしめ置たり、其邊惣て白骨累々として岩石悉く鮮血あまじくに染て有り」と云ふ境であつた。そこで橋次が月光を透して相見えたのは嫂であつて、その人は夫の敵たる賊魁から妻たるべく強迫され、三日の猶豫の中、その最後の夜に瀕してゐた。それが「安積沼」の男鹿山の月明に、波門の眼に映じたのは、樹林の小屋に呻く

十餘箇の人で、「或は耳鼻をそがれ、目をくられ、舌を抜き、或は手脚の指を断たれ、七死八活しちしちやうはつぱく只苦痛に堪へずして號哭ごうきく聲いと哀れなる」殘虐と共に、人肉料理の凄愴たる光景であつたが、その間に傷なき唯一人の女を見た。それは鬼畜時田彌仲の妾たるべく、諾否の三日間の猶豫の下に、死を覺悟せる、妻の鬘兒まつごであつた。敘述は「安積沼」の方が數等濃彩で、陰慘と戰慄とを太い描線で表現してゐるが、着想の連關は云ふまでもない。然も、その典據は地獄變相の印度思想に胚胎するものであらう。

かくの如く大筋の上での印象を初め、構成上の細部、また、重要性を帶ぶ素材等に於ける類似同想は、二年後の刊行たる「東嶽錦」が、「安積沼」の風下に在るものと見なければなるまい。

## 五

小枝繁がその讀本の第二作を執筆するに當つて、手近な評判作を模範とした事は極めて自然の徑路である。如上の個條のみに限らず、讀本創作上の當代の「型」は、細かい道具立にも及んでゐるが、その邊の消息もやはり看過してゐないやうである。例へば、超人即ち人物の宿命を示唆し吉凶を判する者に、「東嶽錦」の一奇僧あれば、「安積沼」には了然尼がゐる。この奇僧は刹那的出現で、全體には無力な存在に終つたが、了然尼は實在人物の採擇（新著聞集）五、崇行篇。「紫の一本」等に見ゆ）であると共に、終始した超越的偉力の表象となつてゐる。また、幽靈、妖異の跳梁は、この種の浪漫的小説には枚擧に遑ない程である。この兩篇のそれに關しては既に指摘した通りである。寶刀に就ては、これに妖魔切の劍があれば、かれに交剛大功鉞の刀がある。更に絶えず使驅される動物を物色すると、こゝに猿と狸とがゐれば、かしこに狼がゐる。因みに「優曇華物語」まで目を遣れば、超人に金鈴道人あり、幽魄に忠臣健介の妻

眞袖あり動物に猿猴などがあつる。敵役たる凶惡の徒が、山寨に籠り良民を虐げるのも常套的作爲であるが、勸懲主義標榜の鐵則に準據して「正」の凱歌「邪」の殞落に、終局を結ぶ事は喩々を要しない。

語つて猶こゝに一事象を云ひ落してゐる。それは「東嶽錦」の賊魁嘉藤次が大磯通ひの黒頭巾と云ふ扮装に就てである。(文藝に現はれた大磯花街の近世化に關しては、此際、穿鑿すべく問題外としたい)。この嘉藤次は配下兩三輩をも同装に扮せしめてゐた。橘次は彼の歸路を松林の裏に要して、或は斬り、或は捕へたのである。この着想は京傳の「稻妻妻紙」(文化三年刊)で、名古屋山三郎が不破伴左衛門を邀撃するの光景に酷似してゐる。尤もこゝには遊女葛城の「身代り」と云ふ悲愴なる苦衷が纏絡してゐるが、これと「鞘當」とは別として、たゞ此處では扮装のカモフラージュと、仇人要撃との素材に就てだけ云ふのである。即ちこの場合、京傳の作が後年のものであるだけ、先蹤は「東嶽錦」にあると云はねばならない。但、こゝには歌舞伎に採られて或る「型」を生じた國民傳説系の一趣向「影武者」が映つてゐる事も否定できまい。

## 六

「安積沼」に就て「江戸作者部類」は語る。

俳優小幡小平治が冤鬼の怪談を旨として作れり。いよく時好にかなひしかば賣れる事數百部に及びしと云ふ。

京傳にはこれ以前に「忠臣水滸傳」の作があり、赤穂義士と水滸の世界とを綯交ぜにした仕組から成り、かなり奇矯であり不調和でもあつたが、「新奇の物を見ると云ふ世評特に高かりしかば、多く賣れたり。此頃よりして讀本漸く流行して遂に甚しくなるまゝに、京傳の稿本を乞ふて板にせんと欲する書賈尠ならず」(作者部類)と云ふ状態であつた。

「此頃よりして」とは、享和前後を指したもので、この筆致は續く文化文政の讀本全盛期を思念せしむるのである。

小枝繁も此の風潮に乗じて綺語を弄するに至つた人と思はれる。處女作『東嫩錦』刊行の文化二年は、かの「名人忌辰錄」の年號を信據すれば、彼の四十七歳に當り、水戸侯の士分であつて見れば、筆のすさびの創作は、年齢には關はるまいが作家としては遅時の感がある。もし「天保九年歿六十八歳」と假定すれば、この年は三十五歳の壯年期で、士人としての處女作執筆にふさはしい年輩である。而して京傳は此年四十五歳に當る。若冠より筆で暮した京傳は、既に黄表紙・洒落本の世界に於ての總帥格で、文壇なる言葉は當時にふさはしくないが、斯界の重鎮として聲名一世を壓するものがあつた。寛政の筆禍以後、讀本の方面に現はれたが、『作者部類』の云ふ如く世評は高く、馬琴の健筆には較ぶべくもないとは云へ、驅け出しの馬琴に對しては、先輩匠格の位置があり、加ふるに、長年叩き込んだ戲作界の潛勢力には頗る偉大なるものがあつた。この威容即ち世俗での貫敵はかなり強く小枝繁の眼に映つたに相違ない。

京傳の讀本の作風は、その素材を歌舞伎淨瑠璃と國民傳説とを何くれと拮据して、當代社會相の二大事象敵討及び御家騒動に結構して一篇を構成するにあつたが、その機構の筋合が緩く、常に支離の弊を暴露しがちである。けれども變幻怪奇の筋の運びに、緊密なものに缺けながら、走馬燈式の面白味を否定する事はできない。歌舞伎式構想に感興を持つ當代の大衆が、大向ふから喝采したのに無理もないのである。一例として『安積沼』の素材を挙げると、『宮戸川物語』風の繪姿説話、『根無草』を模倣した孝子身賣説話、『牡丹燈記』流の護符説話（こゝは「雨月物語」から）、また前記の「孝肅傳」などを採擇し、作中人物には、萬葉の有由縁歌、俳優叢談、新著聞集、五元集（又は「四場居百人一首」）など、雑多な方面に典據を求め、又、『優曇華物語』では（一）鴛に摺はるゝ子供の話（日本靈異記上・今昔物



語卷二十六・元享釋書―良辨杉、等)、(二)洪水説話(今昔卷十、挿神記・述異記等)(三)醫者誘拐説話(傳奇作書初篇・本朝櫻陰比事四、等、(四)觀音靈驗談(今昔物語卷十六・その他、類例多く、こゝは美濃谷汲山縁起)の四個の説話系列を糺り合せて仇討談を作爲してゐる。これらは「東嫩錦」刊行以前にかゝる、京傳の作品の組成を瞥見したのにすぎないが、京傳の取材の一般にこれによつて窺はれる。

當時の小枝繁が、如上の作爲に感化を享けた事は自然の成行で、特に「安積沼」の印影が深いと云ふ事は、もはや明らかであると思ふ。彼の讀本は凡て十五六篇を數ふる事ができるが、題材によつて分類すれば、

巷談物、 東嫩錦。木之花草紙(梅川忠兵衛)

傳説物、 柳の糸(三十三間堂棟木由來)。神媛傳(愛護若傳説)。松王物語(築島傳説)。道成寺鐘魔記(清姫傳説)。

歴史物、 壁落穂(新田義統功臣録)と同一と思はれる。小栗外傳。景清外傳。橋供養。

等である。このうち「小栗外傳」では水滸傳型發端を採擇し、人買傳説や繪姿説話や、また「雨月」の吉備津釜、「繁々野話」の白菊などを持込んでゐるし、「壁落穂」の初めには「月氷奇縁」が、「松王物語」の半ばには「金鳳釵記」が反映するなど、この作家も亦、國民傳説・巷談街説、また支那稗史、更に同時代作家の巧想をなにくれとなく攝取し瀟過して、自家樂籠中のものとした事がわかる。而して大體としての作風は、巷談・傳説から野乘史譚に推移の路を示し、作家としては京傳から馬琴へその目標を轉換して行つたと謂ふ事ができよう。

纏述、映じ來る陰影をも採り入れたけれど、此の小稿は小枝繁の處女作が、京傳初期の一作品と密接なる交渉のもとに書き上げられた事を提擧するにとゞまる。(昭十、十)